

I b u k i
息吹

4号

2012

こんにちは。清く正しい？選書係です。11月に入って学力推移調査等がありましたが、我々も獅子奮迅の活躍ができたのではないかと思います。
さて、勉強環境などの調査の際に、本や新聞を読む項目が出てきませんでしたか？
調査に出るほど、読書をするのは注目が集まっているのです。
これを機に少しずつ本に触れていってはどうでしょう？

目次

選書係からの贈り物

…p 2

選書係 x 教職員

…p 3~p 4

小説

…p 5~p 6

Staff

ホームページのお知らせ

…p 7

選書係からの贈り物

お久しぶりです！

選書係がオススメする本を紹介します！！

『天使と悪魔』

著：ダン・ブラウン 訳：越前 敏弥 出版：角川グループパブリッシング

ヴァチカン市国にて、新教皇が選出されようとする中、4人の枢機卿（次期教皇候補）が行方不明になった。犯人は、17世紀にガリレオを中心とした秘密結社「イルミナティ」。彼らは過去に受けた迫害の報復に、24時間以内に、ヴァチカン市国内で4人の枢機卿を殺すと脅迫する。これに対し、ラングドンは、知恵を駆使して、この難問に立ち向かうが、さらなる悲劇が待っていた。

今回の物語は「宗教と科学」について書かれています。実に興味深い本なので、ぜひ読んでみて下さい。

中三 U

『蒲生邸事件』

著：宮部 みゆき 出版：文藝春秋

予備校受験のために上京した受験生の孝史は、泊まっていたホテルから時間旅行者と名乗る謎の男・平田によって1994年から1936年の二・二六事件が起きた頃の豪邸の前へタイム・トリップをさせられ、九死に一生を得る。

しかし、その豪邸に住む蒲生元陸軍大将が死ぬという事件が発生。動揺する人々をよそに、孝史は衝撃の事実を知ってしまう…。

歴史の流れに対し、人がどこまで抵抗できるのかを人々の生き様を交えて描かれています。

高一 Y

選書係×教職員

～第3回 石井 学先生～

第3回は我が佼成学園生物担当の石井学先生です。石井先生は図書室に理科コーナーを演出して下さいています。今回はお忙しい中、快く協力して下さいありがとうございました。

『神々の山嶺』 上・下巻

著：夢枕 獺 出版：集英社

Q1 なぜこの本を選んだのか

大学時代の私が単純に冒険に憧れていたということもある。しかし、私は物語の中で山に対して純粋に強い執念を持ち続ける主人公の男の生き様に感動した。

この物語では、運に見放されているとも思える男が自然の圧倒的な力に執念で立ち向かう。単純な私は、この物語を読んで以来、物事に対する強い執念こそが自力で運を引き寄せる唯一の方法であると信じるようになった。

自分の世界に嚙りつくことは、ひょっとしたら周りの仲間や大切な人に迷惑をかける事なのかもしれない。しかし、決して意味のないことではない。奥歯をギリギリと食いしばり、自分の為に意地になることが必要な場面なんていくらでもあると思う。そんな時は絶対に逃げて欲しくはない。少々大袈裟に語ってみたが、このような志の片鱗を少しでもこの本を通して感じ取ってくれる学生がいたら嬉しい。

Q2 本の内容と感想

物語の中には様々な話が並行しており、簡単には紹介することは難しい。また、どのような物語と捉えるのかは読んだ人によって変わってくるだろう。私が紹介するのであれば、「岩山をよじ登る男たちとその生き様が描かれた物語」ということになる。

でも、山好きな人には申し訳ないが、私は山に対してさほど興味がない。山を登るよりも深く水に潜っていく方が好きだ。趣味は魚釣りで特技は水泳。山には学校行事と溪流釣りぐらいでしか立入ることはない。

要するに、この物語は、内容こそ「岩山をよじ登る男たちとその生き様が描かれた物語」ではあるが、山好きか否かは関係ない。とにかく、次の展開をワクワクしなから読み進めることができる小説である。何よりも、人気格闘漫画『餓狼伝』の原作者でもある著者の夢枕獺氏独特の力強いストーリー展開が全く飽きを感じさせない。難しいことを抜きにしても是非お勧めしたい。

Q3 今まで読んだ本の中でお勧めの本

たくさんあるが、その中で夢枕獏氏の本を紹介してみる。作者の趣味が私と同じ「魚釣り」であることも、勝手に縁を感じている。その中で『黒塚 KUROZUKA』は、今回『神々の山嶺』と悩んだもう一冊の本である。機会があれば、是非手に取っていただきたい。

* 夢枕獏氏の本 *

『鮎師』 出版：文藝春秋

『釣り時どき仕事』 出版：中央公論新社

『黒塚 KUROZUKA』 出版：集英社

『本日釣り日和』 出版：あんず堂

『毎日釣り日和』 出版：毎日新聞社

『餓狼伝』 出版：双葉社

小説

2学期も残りあとわずか。思えば10月末には中間考査がありました。
そして今月は、中学生は学力推移調査、高校一年は河合塾全国統一模試。
さらに、約10日後には期末考査が控えています。
そんな中、我ら図書委員会選書係は、勉強する間も惜しんで、小説を書きました。
「勉強しろよ。」と言われても、仕方ありません。
結構面白いので一度読んでみて下さい。
もしかしたらこれが、あなたの人生を変えることになる小説かも知れないのだから……。



「非日常」

作：中三 U

回想

あの日から僕の日常は終わった。平凡で平和な日常はなくなった。世の中全てが異彩、異常へと変わった。全ての自分の価値観が否定された。考えてみれば自分が何時何処で何をしているかさっぱり分からない。下手をすれば、僕が在る事も認識できない。そして自分がいる世界すら認識できない。

ただ分かる事は一つ。

あの日から“日常”は“非日常”に変わった。

僕はとある公立高校の一年生。所属は帰宅部で特に取柄もなく、小学生の時も中学生の時もそうだった。毎日が平凡で平和な人生であると、当時の僕はそう考えていた。しかし、何の前触れもなく、僕の日常は崩れ去った。

いつの頃だろうか。

それは、僕が家に帰ろうとしていた時だった。帰り道の途中、目の前に謎の仮面を被った少年が現れた。

その少年は不敵な笑みを浮かべながら、

「久しぶり、君と話すのは何年振りだろう。」

と何年も前に会っているかの様な口ぶりと言った。

しかし、僕はこの少年とは全く面識はない。

「君は誰なんだ？」と尋ねた。すると少年は、

「覚えてないのか？僕は…君だ。」

正直動揺を隠せなかった。まるで夢物語のようだ。

もしかしたら僕はドッペルゲンガーと対面したのかもしれない。

しかし、ドッペルゲンガーと会って死ぬのなら僕は死んでいるはずだ。それならこの少年は一体何なのだろう。

すると、少年はこう言った。

「

その瞬間、僕は心臓を抉り取られる様な衝撃を受けた。

「何で君はここに在るの？」

一見変な事だと思うが僕には分かる。この少年は確信を突いている。そこで僕は、
「もし本当に君が僕なら、僕がどう答えるか教えてくれ。生憎、僕はこの質問には答えられない。」

「……………」少年は黙ってしまった。

え！？、ちょっとどうした？そう思って、

「じゃ何でそんな質問した」

「…その場のノリかな…」

「ノリで質問すんなっ」

さりげない漫才。

「でもさ、もし、これが本気の質問ならどうする？」

さすがに黙ってしまった。

「ところでさ、君ってすっごくつまらない人生を送っていると思うんだ。

どうせなら、僕と一緒にさ、非日常な世界に行かない？」

気のせいか、心臓の鼓動が早くなっていた。

まるで、彼の言う“非日常”を楽しみにしているかの様に。

「わかった。」

勝手に口が開いていた。

「じゃ、一緒に行こう。」

…回想終了…

僕はこの世界にいて、どれくらい経ったかわからない。

しかし、もしあの時の質問を再び言われたとしたら、僕はこう答えるだろう。

「明日のため、今日を生きるからだ。」

終

～ホームページのお知らせ～

開室時間や新着図書など掲載しています。
Web版の息吹も公開中です！

HPアドレス → <http://libweb.koseishinro.com/>

《発行》

2012年11月24日



図書委員会
選書係
より